

第6回総会研究会を終えて

村田 紀

第6回総会研究会会長 千葉県がんセンター疫学研究部

地域がん登録全国協議会の第6回総会研究会が去る平成9年9月12日、千葉市において開催されました。全国37の道府県市からほぼ200名の方が参加され、盛会裡に終了することができました。今回はテーマを**がん登録とコンピュータ**としました。前号でも述べましたように、パソコン等OA機器の最近の発達を取り入れ、登録作業の効率化を図ることと、電子化された個人情報の取扱いの問題点を明らかにすること、が趣旨でした。

11日午後の登録実務者のための研修会と自由集會も、予想を上回る120名の参加を得、**研修会**では、院内登録や地域登録用に開発された、生存率計算用ソフト、ICD-10コーディングチェックプログラムなど、日常作業にすぐに使える便利なパソコンソフト類の紹介と解説が行われ、またソフト類が、フロッピーディスクにより無償提供されました。**自由集會**では、3グループに分かれて、1)がん登録における予後調査の実際、2)がん検診の有効性の評価への登録資料の利用、3)ICD-10の導入状況、4)機密保護に対する配慮、5)パソコン利用状況と今後のシステム開発、などについて、熱心な討議が行われました。時間が限られていたために、お互いの状況が判りあえるほど深い交流ができにくかったことが、反省点でした。

総会当日には、まず厚生省の老人保健課松谷課長から、「がん登録の意義がなかなか一般には理解されているとはいえない状況だが、厚生省としてもその普及に努力していきたい」とのご挨拶があり、次に同省生活習慣病対策室上室長補佐からは、新たに設置された生活習慣病対策室の紹介と、その中で、「がん患者数の将来予測やがん医療の評価にがん登録を活用して行きたい」というご挨拶がありました。がん登録に関わる部分の厚生省の組織替えの直後でしたので、今後どのような体制でがん登録に対する支援が行われるのかを、ある程度聞くことができたことは有意義でした。

午前の部では、国立がんセンター阿部総長の「がん診療の現状」と題する、平易でしかも視野の広い特別講演があり、そのあと関東甲信越の6がん登録からの報告がありました。中でも近年発足し精度の高い新潟県がん登録の紹介が印象に残りました。

午後は、総会に続いて、厚生省研究班(大島班)の活動の紹介と前日の実務者集會の報告があった後、今回の

主題「がん登録とコンピュータ」の部に入りました。まず山口先生(国立がんセンター)の教育講演では、マルチメディアとは何か、という基礎から説き起こして、マルチメディアがまだまだ未成熟な段階である故に、これを自在に活用することができていない現状と将来像などを話されました。これに続くシンポジウムでは、具体的なOA機器の活用例として、新潟でのフロッピーディスクによる登録の試み(小越先生)、岡山でのOCRによる登録(川村先生)、千葉での登録票の光ディスク保存(高山さん)などの報告があり、次いで津熊先生(大阪成人病センター)からは院内登録ソフト、中川先生(国立がんセンター)からはインターネットを利用した登録、味木先生(大阪成人病センター)からは登録業務とコンピュータ、浜島先生(愛知がんセンター)からは個人情報保護と倫理、について、それぞれ講演があり、そのあと総合討論が行われました。

時間の制約から、論じ足りない事、聞き足りない事もたくさん残りましたが、前日の研修会、自由集會も含めて、参加者にとって、がん登録の日常業務にすぐにも役立つ知識が得られ、その意味でも意義のある研究会になったのではないかと自負しています。終了後に多くの方々から好意的な感想を頂戴しましたが、会の成功は、プログラム委員の皆様(小越和栄、山口直人、金城芳英、武田純子、岡本直幸、井上真奈美、津熊秀明、味木和喜子各先生)、ご後援いただいた方々、および会員の皆様のお蔭と考えております。最後に篤く御礼申し上げます。

編集後記

年2回の刊行を目標として、本No.2は新年1月末の刊行を予定していました。御執筆いただいた方々には、一際御多忙な時期に、締切りまでに原稿をお送り下さり、心から御礼申し上げます。

前号刊行以降の半年は、日本の地域がん登録にとって大きな変革の時期の始まりとなりました。しかし、世界の潮流は、がん登録が社会にとって必要なツールとして定着する方向にあります。本号では、学会報告が多くなりましたが、世界のそのような流れ、ならびにがん登録の方法論と活用との研究の流れを知って、各登録が今後の活動の方向を考える一助になれば、と存じます。

NEWSLETTERに対する御意見をお寄せ下さるよう、お願い致します。 編集委員：花井 彩、藤田 学